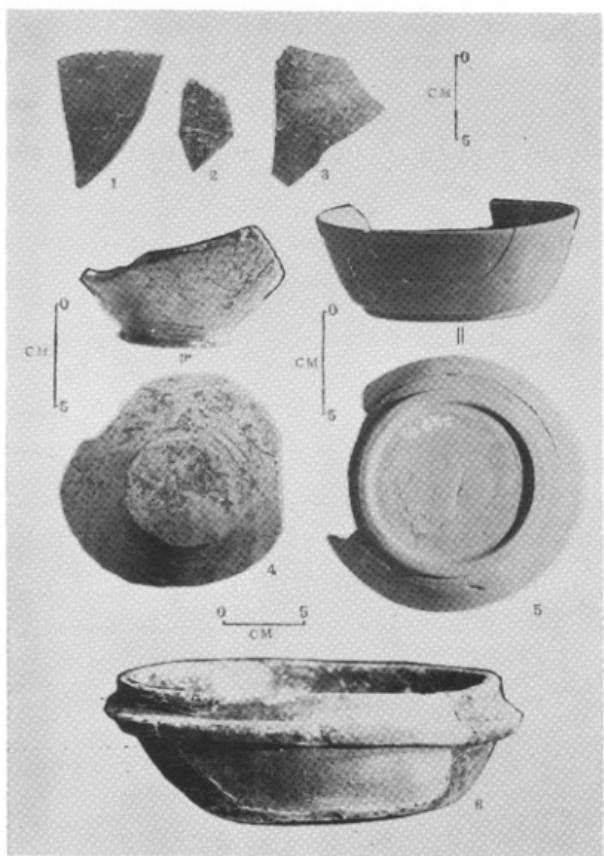


弥生土器・須恵器・石鍋・古備前



1～3はE地区出土の古備前焼種壺の破片である。第一次発掘調査の際、E地区の第Ⅱ層黒色腐植土層から出土す。室町時代のものと思われる。

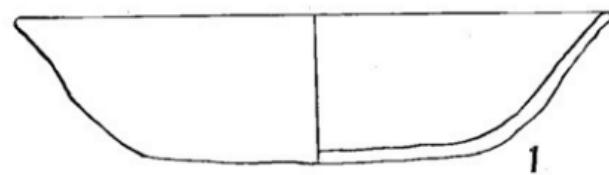
4は第二次調査においてAトレントン第Ⅲ層紗交り灰褐色粘土層から出土したもので、外面には敲目痕があり、底部は小さな平底の貼布底である。弥生終末期のヒビノキⅡ式上器の形態であろう。

5は第三次発掘調査において、中世の構造遺構の近くから発掘された須恵器の杯であり、その器形から9～10世紀代のものと考えられる。あるいは先に述べた綠釉陶器と同時期のものとも考えられ、律令体制期における郡司級の邸宅も近くにあったのではないかとの推考もできうる。

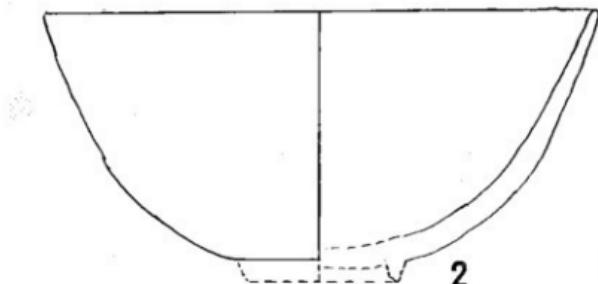
6は雲母片岩で作った石鍋。口

径28.8cm、高さ6.7cm、底径16.4cmで、鍋の部分から下は真黒くすすけている。雲母片岩製であるので、上佐国以外からの移入品である。Eトレントンの第Ⅲ層黒褐色粘土層から出土す。石鍋の初見は文献上では、弘長元（1261）年の京都の仁和寺の譲り状にみえ、現在佐賀県の一部では鯨のチリ焼に使用している。このEトレントン第Ⅲ層には瓦器・土師器・須恵器・土錘・須恵製羽釜・土製羽釜が出土し、主としてそれらの遺物の年代は平安時代後半から鎌倉時代終末にかけてである。

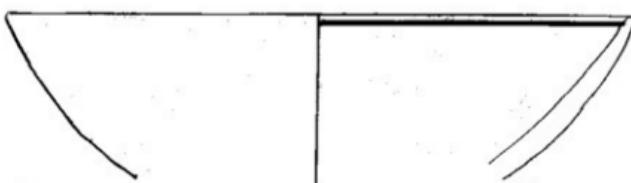
A トレンチ出土の土師器と瓦器



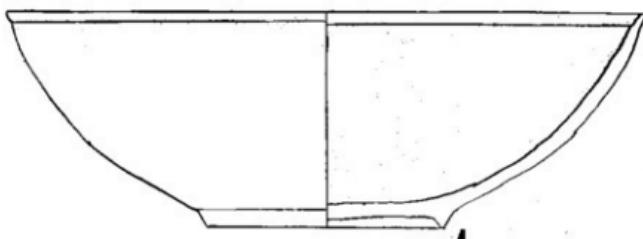
1



2



3



4

10 CM

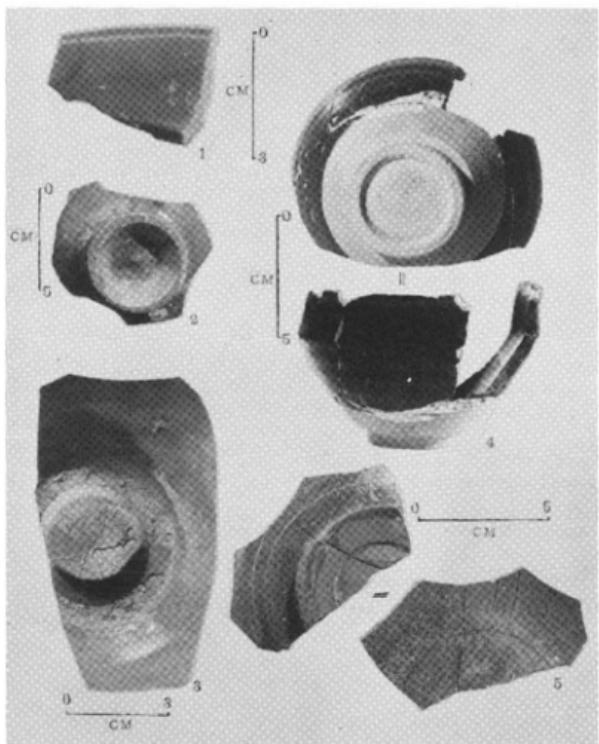
0

A トレンチ出土の土師器 (1・2) と瓦器 (3・4)

A トレンチ第Ⅲ層黒褐色粘土層から、石鍋が出土したが、この層から石鍋と伴出したものに、ここに掲げる土師器の杯と碗、それに瓦器製の椀がある。これらの遺物は次の第Ⅳ層の褐色粘土層の上部にもある。土師器は非常に良質なもので赤褐色をなしている。1は内面が黒くすすけているところから、灯明皿として使用されたものであろう。2の土師碗は高台を持つものである。

瓦器は内面口線近くに凹線一条を持ち、3は内外面とも黒くいぶしている。4は外面は口線近くだけ、内面は一面を黒くいぶしている。底部は高台であるが、張り付け台である。土師器・瓦器とともに平安時代末から鎌倉時代に、位置づけてよかろう。

青磁・瀬戸・天目・緑釉



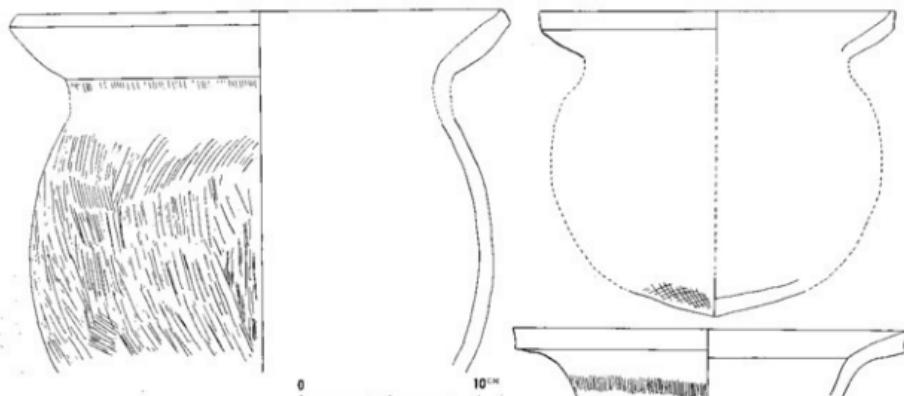
1は宋青磁破片で天目茶碗などの出土した地区での表面採集品である。淡い青磁色をなす。2も青磁であるが、珠光青磁にたまにみるが如き褐色を呈するものである。高い高台であり、内外面に細かい貫入がみられる。たぶん南宋～明代初期の青磁の一種とみて誤りないものであろう。3は径の小さい高台を持つ青白色の灰釉が一面にかかったものである。内底には、重ね焼の跡の目が四つついでいるし、高台にも四つほど重ね焼の痕がある。古瀬戸の平茶碗とみてよくはなかろうか。

4の天目茶碗は口径11.2cm、高さ7.6cm、高台4.9cm、高台の高さ0.8cmである。出土直後の写真にみる如く、器表には油滴天目のみられるが如き斑点状のものが一面にみられたが、その後それは余り明確にみられなくなった。しかしやはり茶褐色の斑点がすこし残っている。これは初期の瀬戸天目茶碗によくみられる普通ソ

バと呼ばれる石灰塗の晶点が点在するためであろう。胎土は茶碗の割れ目や釉のかかっていないところで観るに、あら目の白土を使い、しかも形態、とくに口縁下のくびれの在り方、茶碗全体の立ちあがりなどからみて、これは瀬戸天目として問題ないと思う。高台はつけ高台でなく、削り出し高台である。以上のような諸点と伴出の他の遺物類から推定して、完成された時期の古瀬戸釉天目茶碗としてよからう。そういう意味においても、この天目茶碗の作られ、埋められた時期を室町時代、それもそう早い時期には持っていくことはむつかしかろう。2～4までの青磁・灰釉瀬戸そして瀬戸天目は中世一室町時代に位置づけられる溝状造構から一括して出土したものである。

5は第四次発掘調査にそなえて、県で予備調査を行ったが、その際第四次の溝状造構とみられる付近からみつかった緑釉陶器である。高台は蛇目高台をなしている。内面には鹿描の沈線二本がある。器形は盤であろうか。出土の際、平安時代前期の須恵器の杯が伴出している。

A トレンチ出土の羽釜類

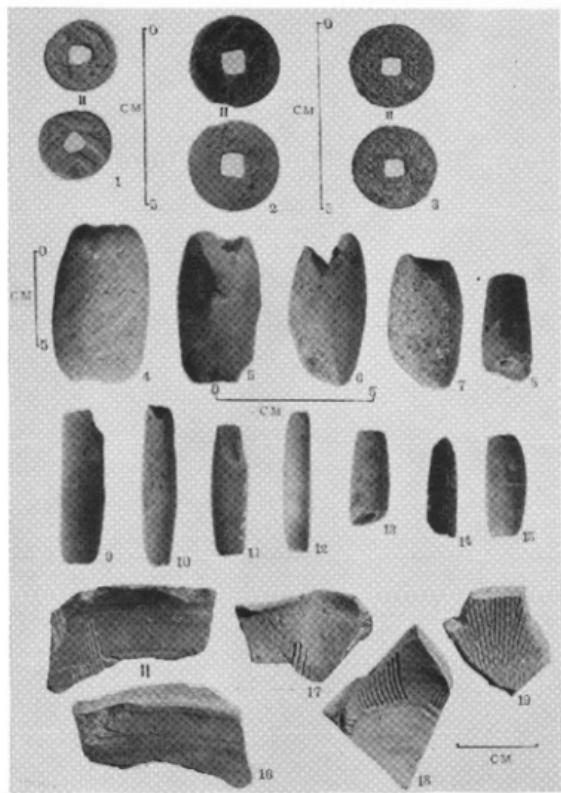


A トレンチ出土の羽釜類

すべて土師質で、口縁部・頸部を「く」字状に作っている。壺形土器とも言えるが、鋸を持った羽釜の形態と似かよっているし、内面に炭水物が付着しているので、羽釜の一種と考えたがよかろう。土師質と言っても、瓦質に近いもので黝褐色をなし、外面に刷毛目痕が残っている。奈良県天興寺極楽坊境内出土のこの種羽釜を使用しての藏骨器の年代から、この羽釜を15世紀後半から16世紀初頭として誤りなかろう。E トレンチにおいて、第Ⅱ層の黒色腐植土層、そして第Ⅲ層の黒褐色粘土層の上部から、糸切底の杯などと併出している点からも室町時代に位置づけて誤りない。石屋敷遺跡における平安時代・鎌倉時代の遺物が豪族層のものを示すに対し、室町時代のものは庶民的な遺物に終始するようである。

(注) 坪井良平『日本仏教民俗基礎資料集成 元興寺極楽坊』

銅 錢 · 土 錘 · 擺 鉢



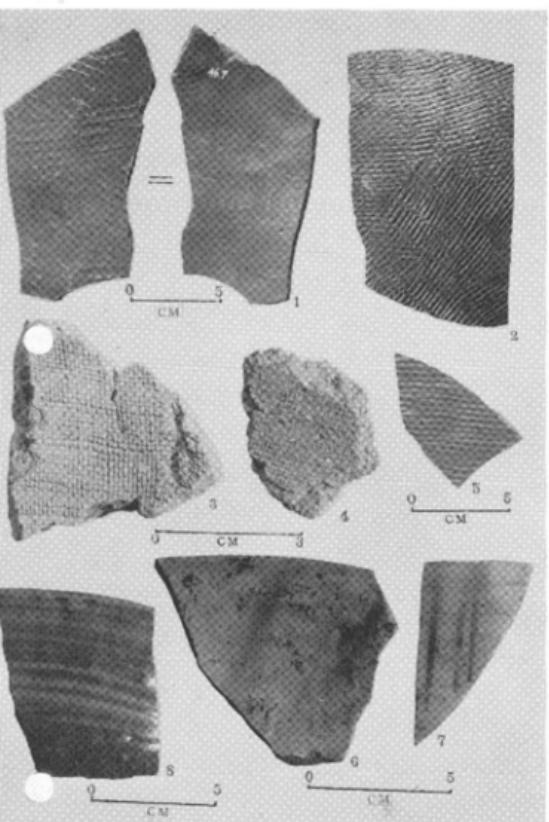
銅錢のうち 1・3 は中世の溝状造構から出土したものである。1 は延喜通宝、醍醐天皇の延喜七（907）年に鑄たもの、銅質悪し。3 は元寶通宝、北宋神宗元豐年間（1078～1085）に鑄たものである。これらは中世において流通したもの。2 は清朝の康熙通宝で康熙年間製（1662～1723）で、表土層下部から発見されている。

1～15 は土鍘で、4 の土鍘はとくに大きく 8.2×5 cm である。第四次調査で出土したもので、胎土・色調から第3層の礎まじりの灰黒色土層の上部から出土する室町時代の土師器の杯などに伴うものとみられる。土鍘のうち、出土層位と伴出の遺物のとくに明確なのは、10・12・14 で美しい敲目痕を持った須恵器や高台を持った土師器、そして瓦器と伴出し、E トレンチの第Ⅲ層黒褐色粘土層から出土している。そういう点からみて、細手の粘土粒子も美しい土鍘は、平安末から鎌倉時代のものと言えそうである。なおその他の例えは 6・7・11 の如き土鍘は、

室町時代の古備前焼と伴出し、その時代のものと考えることができる。

16～19 は山根遺跡の西部の道路の溝さらいの時、表面採集したもので 16 は須恵質の片口の撗鉢であり、鎌倉時代のものであろうか。17・18 は古備前焼の撗鉢、17 は片口の撗鉢、17・18ともに室町時代に位置づけしてもよいと思われるが、18 はやや時代のくだるものである。19 は同じ備前焼であるが、桃山から江戸初期のものであろう。

須恵器・陶器片・埴堀片・土師器・尾戸



第III層黒褐色粘土層の上部（地表面下約40cmの深さ）から鉄津・糸切底のある土師製杯・焼けた蛭石など併出。さらに周辺には小さな岩石片が数個みられた。従来の経験と、今回のこの出土状況からこの土器片を埴堀片と考えたわけである。なお元鉄鋼短大横川清志助教授に、この鉄津を分析していただいた結果として、溶融鉄津であるとの結論を得た。出土の土師製杯などから室町時代の鐵治関係遺跡であろうか。

6・7はEトレンチ第II層黒色腐植土層に包含されていた杯破片である。底部は存在しないが、糸切底の底部を持ったものである。良質の粘土で薄手で焼いているが、特に注意したいのは火だきの手法を持っていることである。

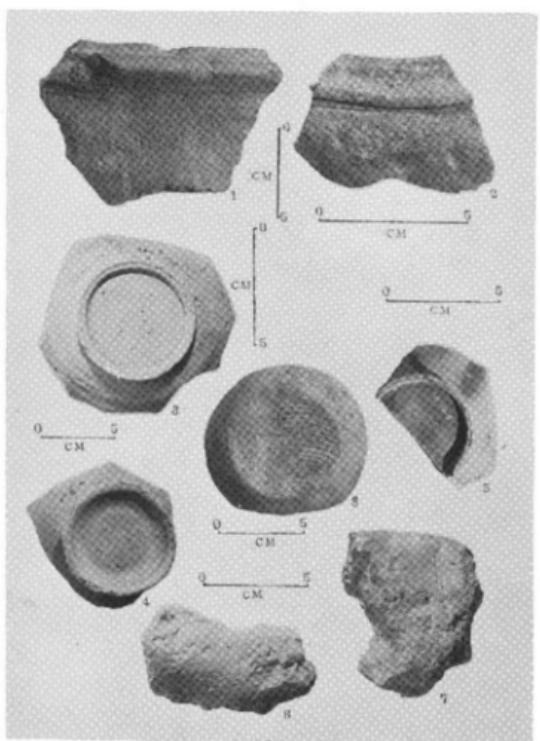
8は藩政後期の抹茶茶碗で、褐色の釉に刷毛目を内外面に入れたものである。尾戸焼にもこの手の抹茶茶碗があるので、現段階では尾戸焼としておこう。Bトレンチの表土層から出土している。

1は中世溝状造構のなかから天日茶碗などとともに併出した（No.7）須恵質の陶片である。いわゆる須恵器とは異なり、二次的に火を受けて内外面が赤褐色をなしている。しかし表面の敲目痕、内面の青海波文はまったく須恵器の鏡の一部には間違いない。問題は天日などと併出している点で、このような須恵器が室町時代まで、この地方で焼かれたのか、あるいは平安後期一鎌倉時代のものが伝世され、室町時代に埋められたのか今後の検討を要する問題である。

2は陶土・焼成・色調とみられないこともないが、器面における敲目痕は備前焼とは考えられず、むしろ土佐国のことから平安末期から鎌倉時代にかけて、このような須恵器系統の陶器を焼いたのではないかとも考えられる。5の陶器はそのことを示す破片であろう。2も5も中世溝状造構外の遺物包含層から発見されたものであるが、外側の敲目痕は平安時代のこの地方の須恵器によくみられるものであるが、焼成・色調は備前焼に近いものである。この5の陶器は特にその作りからみて、土佐で焼いたものと言う事のできるものである。かかる点において、古代末から中世初頭ないしは鎌倉時代にかけての日常雑器を焼いた窯跡の研究は、急を要するものである。1・2・5の須恵器・陶器について、すべてかく言えるわけである。

3・4は裏面に布痕のある土器片で、小さく割れている。表面は指頭痕の一面对つたもので、手でこねて作った土器とみられるが、出土状況はEトレンチの

羽釜・土師製杯・鞆



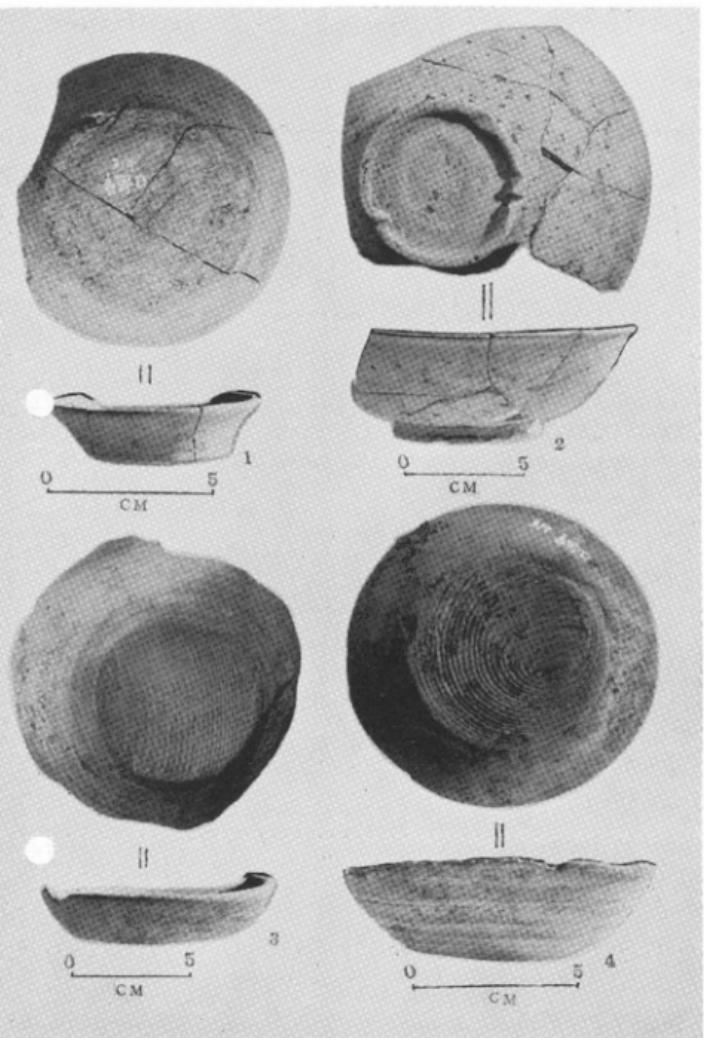
1・2は羽釜である。ともにEトレンチよりの出土である。1は第III層の黒褐色粘土層(深さ地表より約40cm)より出土し、2は第II層の黒色腐植土層(地表より約17cmの深さ)から出土している。1の羽釜は土師製で、頸部は短い。ただ頸部はやや内傾して立上り、その上坦は平坦である。内外面とも指撫で仕上げている。鉢は部厚く、少し向上に着けられている。羽釜の形式から南北朝時代のものとしてよかろう。この羽釜の口径は34cm大の大形のものである。2の羽釜は瓦質で、頸部はやや内傾している。頸部外面段はその痕跡が残っている。外面には頸はあるが余り張り出さず突端状のものである。このような頸や他の形態から、この羽釜は室町時代前期に位置づけて誤認になかろう。口径15.7cmの小形の羽釜である。

3～5は土師質の杯で、すべて高台を持つものである。高台は貼り付け高台である。淡黄色をした良質の胎土を使用したものである。

杯部にはロクロ目が残っている。4は中世の溝状遺構のなかから出土し(No.2)、5も同様である。(No.3) この溝状遺構からこの種の土師質杯が三個も出土しているところから、この杯の年代を鎌倉時代から室町時代中葉ごろのものと考へてよかろう。5は火だしきが杯の側面にかけられ、底部は蛇の目風の模様が入れられている。

6・7は粘土で作った鞆の口にあたるものである。山根遺跡の西側の道路工事の際、8の土師製杯と併出したものである。鞆口は片面が焼け炭化している。もちろん鞆口の完全な形はなさず破れている。8の杯は糸切痕のある口径9.6cm、高さ2.3cm、底径6.5cmの小さな形で灯明皿などに使用したものであろう。鞆口とこの土師質杯は室町時代のものとみてよかろう。備前焼とも併出している。

土師器の杯



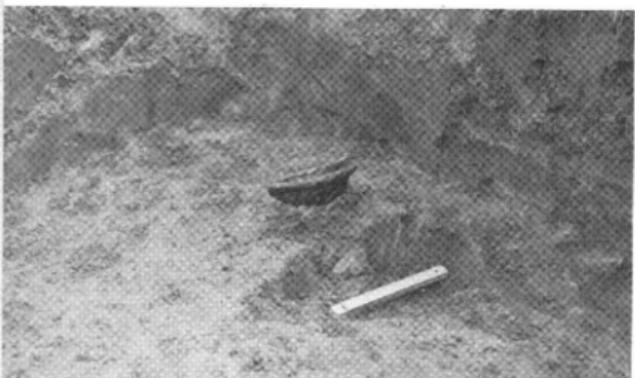
2 の土師器杯は第四次調査によって出現した中世の溝状遺構から出土したものである。出土地点は溝状遺構のなかのNo.6 からである。良質の粘土で作った淡黄色の高台付杯である。口径 17.6cm、高さ 5.2cm、高台径 6.2cm、高台の高さ 0.8 である。高台には四個所程窪で押圧したところがある。貼り付け高台である。鎌倉時代から室町時代中葉ごろのものであろう。

1・3・4 は第三次の調査で、第Ⅲ層の小礫混じりの灰黒色土層から散発的に出土した杯である。すべて土師質で、1 は口径 9.3cm、高さ 2.7cm、底径 6.2cm である。底部は庵おこ

しのあとが周辺部にあり、底部中央部の 4 cm はあとから接合したものである。口縁部がそっているところや、作製法から鎌倉時代～室町時代前半のものであろうか。

3・4 の杯は 1 に対し、糸切底である。ロクロ目も残り、口縁がそりの無いところ室町時代後半のものとみてよかろう。

中世遺物の出土状況



29 E トレンチ第Ⅲ層黒褐色粘土層

より、石錐の出土状況を示す。地表面下より58cmの深さの所より出土す。折尺を置いた間んだところからは、瓦器・土師器杯などが出上している。その地点は地表面下

29 71cmの深さである。



30 B 地区第Ⅱ層黒褐色腐植土層の

上部から、室町時代後半の上部器杯（糸切り底のあるもの）の底部二個が相ならんで出土している光景である。

31 E 地区トレンチ内から高台付土

師器杯の出土状況である。出土層

30 位は第Ⅲ層黒褐色粘土層の上部である。



31

馬場末遺跡



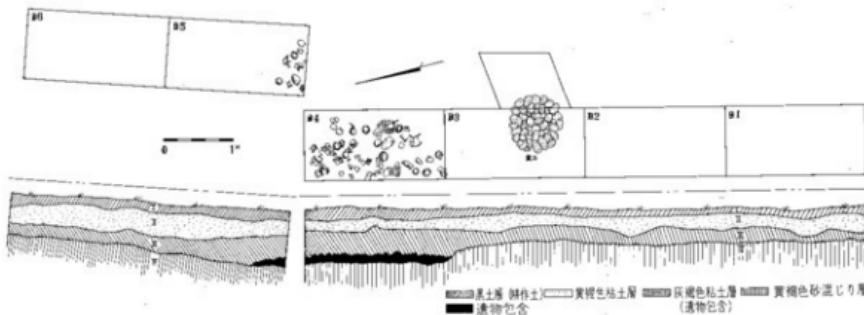
馬場末遺跡

馬場末遺跡とした。本遺跡から出土する土師器は、その数量も多く、器形も多様であり、今までこの様式に属する上師器は、県内でも断片的に出土し、南四国の上師器第Ⅱ式と呼称していたが、本遺跡出土の一群の土師器は一つの様式の各々の器形を有していることから、従来の上佐第Ⅱ式土師器名にかえて、馬場末式土器と呼称することにした。

発掘は50年8月5日から7日まで実施し、福市地区にAトレンチ $1.5\text{m} \times 20\text{m}$ を、馬場末地区にBトレンチ $1\text{m} \times 10\text{m}$ と、Cトレンチ $1\text{m} \times 10\text{m}$ を入れておこなった。

春野町役場前を東西にはしる県道弘岡・下種崎線の役場前より東約1kmのところ、仁野・高知線の交差点にいたる。この両県道にはさまれた北西の一角が、馬場末遺跡である。

発掘調査の場所は西分小字福市と馬場末と呼ばれる地区であるが、特に遺物の出土量の多い地点の地名をとって



馬場末Bトレンチ断面



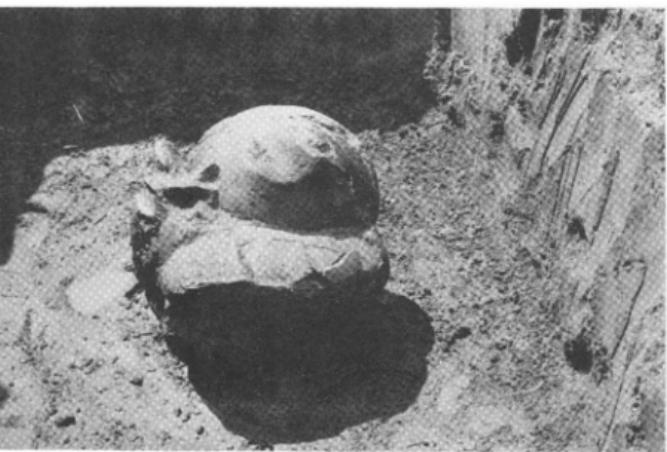
1. Aトレーニチ

須恵器と土師器が出土したが、須恵器の量が多い。須恵器は蓋8、杯4、壺および椀12、盤および高杯8、鉢1で、年代は奈良時代のものが多く、一部平安初期のものもある。土師器は椀と鉢が多く、壺および土鍤もみられた。



2. Bトレーニチ

土師器が集中して発見された地点は、Bトレーニチ4区で杯形17・椀形5・高杯10・壺11・壺4・瓶2があり、別地点から手づくね土器や須恵器の杯と蓋および布目瓦（平瓦）が出土した。



3. Cトレーニチ

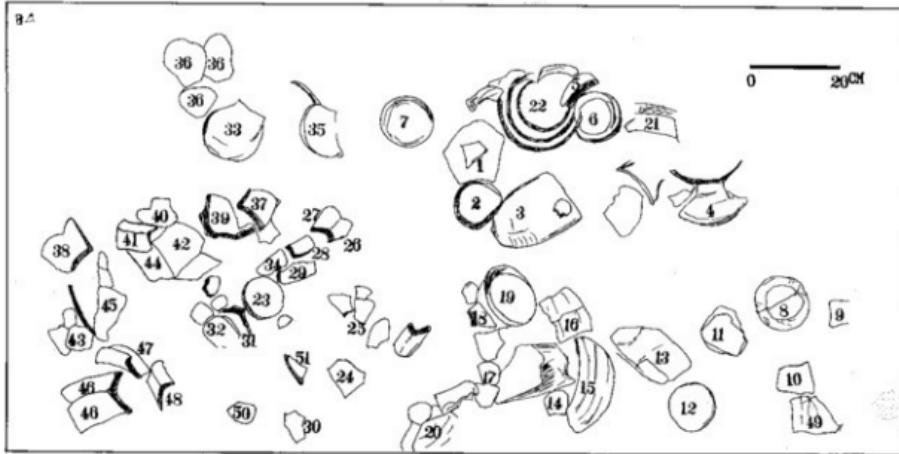
土師器の壺、罐、杯と小形手づくね土器および土鍤が発見され、須恵器は杯・椀・壺・壺などが出土し、CトレーニチI区からは弥生後期末の壺棺も発見された。

3
(58の2・3)

馬場末遺跡 B トレンチ区出土の土師器群



B トレンチ内でも 4 区を中心にして発見されたが、 $1\text{ m} \times 2\text{ m}$ の小区画であり、全様を知ることはできなかったが、その広がりは 5 区の南に小量含まれており、4 区の西側に大きく広がる様相で、おそらく西南方向に溝状に埋蔵されていることを、うかがうことができる。



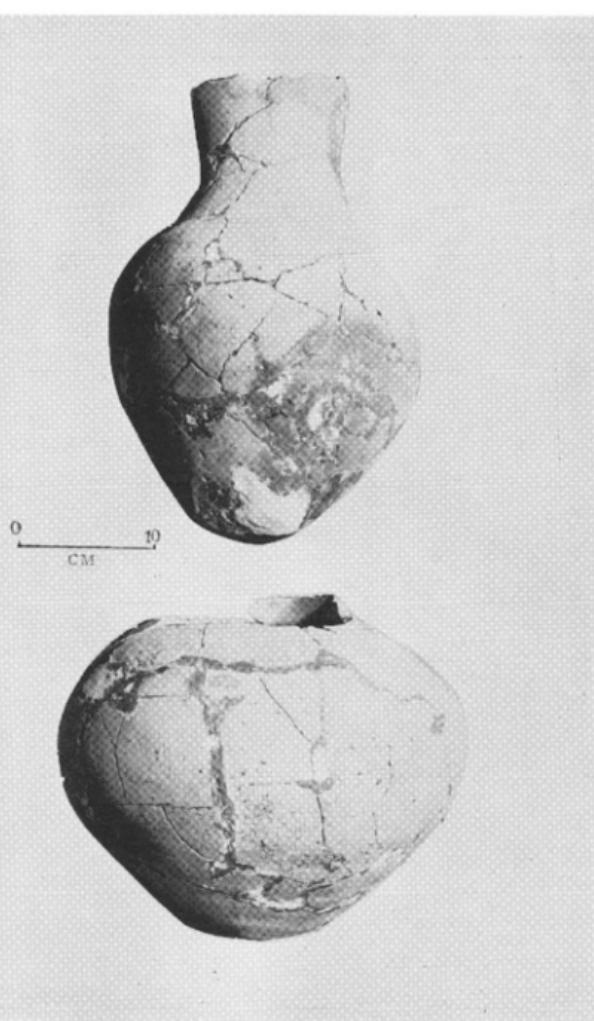
馬場末遺跡 B トレンチ4区・土師器出土状態

No.	遺物	No.	遺物	No.	遺物	No.	遺物
1	甕 胴 部	15	壺	29	甕 11 緑	43	甕 · 塙
2	椀	16	椀	30	甕 脚 部	44	甕
3	甌	17	甕	31	甕 11 緑	45	甕
4	高 杯	18	甕	32	高 杯	46	甕
5	甕	19	甕	33	椀	47	甕
6	椀	20	甕	34	甕 脚 部	48	甕
7	椀	21	甕 口 緑	35	椀	49	甕 胴 部
8	椀	22	椀 · 盆 · 杯	36	甕 · 楢	50	甕
9	甌 · 高 杯	23	壺	37	甕	51	椀
10	杯 · 台付 楢	24	甕 胴 部	38	甕		
11	甕	25	椀	39	甕		
12	椀	26	甕	40	甕		
13	甕	27	甕 口 緑	41	甕		
14	甕	28	高 杯 脚 部	42	甕		

上器出土面は地表

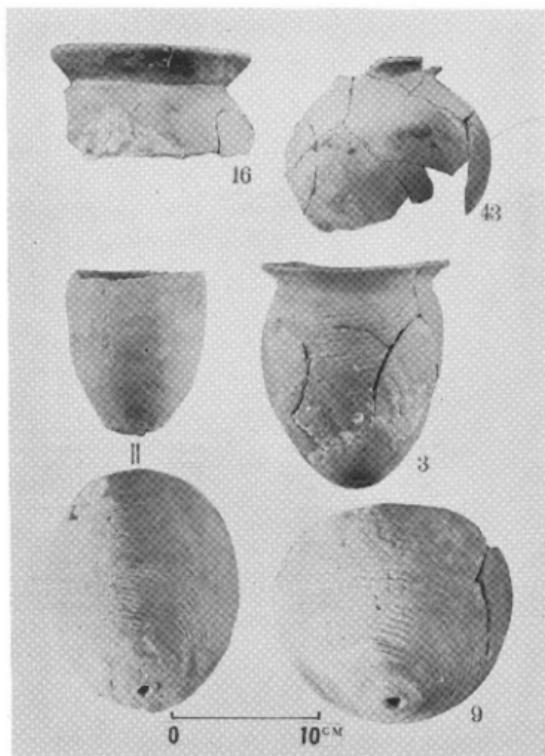
下70cmである。

馬場末出土の壺棺



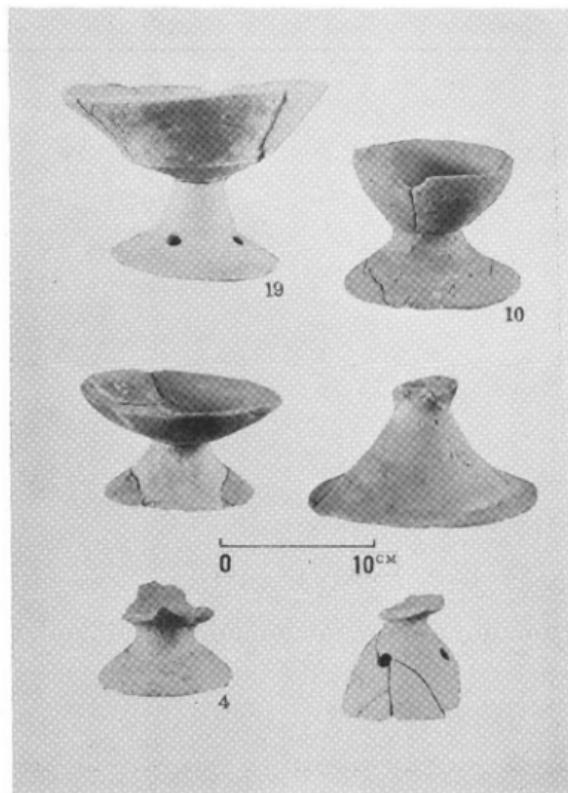
馬場末出土の壺棺を土器として復原したものである。下の壺に遺骸を入れ、上の長頸壺を縦に二分し、それでもって蓋としたものである。上段の長頸壺は口線を欠いている。外面赤褐色で一面に細かい刷毛目があり、一部に黒斑がある。下段の壺形土器は頸部以上を欠いたもので、内外面黄褐色で砂粒を多く含んでいる。これも全面にこまかい刷毛目を持っている。底部は割合に大きな底部を持っている。器形その他の土器の特色からみて、弥生後期後半のヒノキⅡ式土器の壺形土器とみてよかろう。

馬場末式土器 ——その1—— (Bトレント4区出土)



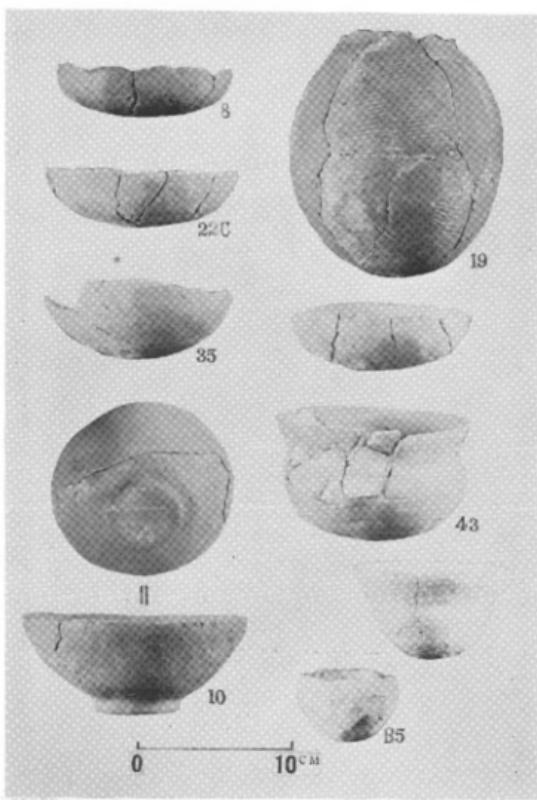
器形	出土地 点番号	色調	胎土	焼成	特色
壺	16	褐色	金雲母を多量に含む	良好	ロクロ整形・頭部に指圧文がみられる。
壺	43	褐色 胴部下黒褐色	々	々	表面の頭部近くに凹凸が多い。 刷毛目整形。内面は凹凸多く指圧文あり。
甌		赤褐色	大小の砂粒を含む	々	内面ヘラ整形・外表面タタキ文あり。
甌	3	褐色	少量の砂粒を含む	々	上胴部に横走のタタキ文、胴下部以降は 纏けずりを行っている。
甌	9	赤褐色	々	々	器面上部は横タタキ文に刷毛目あり。 胴下部はタタキ文、内面にも刷毛目あり。

馬場末式土器 —その2—



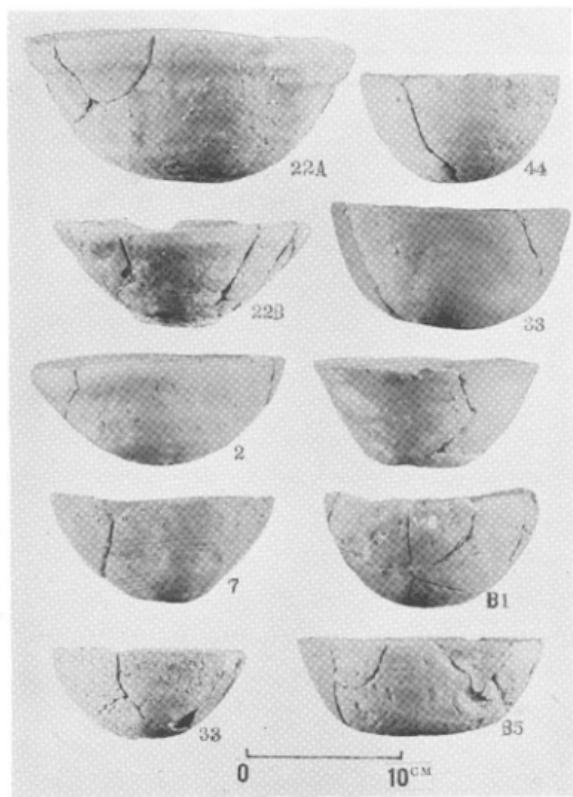
器形	出土地 点番号	色調	胎土	焼成	特 色
高杯	10	赤褐色	砂粒を多量に含む	不良	体部、底部ヘラ整形
タ		タ	大小砂粒を含む	やや 良好	体部・底部ヘラ削り
タ	4	タ	少量の砂粒を含む	良 好	体部・底部ヘラ整形
タ		タ	大小の砂粒を多 量に含む	不良	タ
タ	19	タ	小砂粒を含む	不良	非常に軟質、裾に透穴4個
タ		タ	タ	不良	軟質で透穴4個

馬場末式土器——その3——



異形	出土地 点番号	色調	胎土	焼成	特 色
杯	10	赤褐色	小砂粒を多量に含む	やや 良好	器面削り整形、高台付
椀	22c	タ	小砂粒を含む	タ	外面に一段棱あり
椀	8	赤褐色	小砂粒を多量に含む	良好	タ
壺	43	赤褐色	タ	不良	タ 丸底
壺		褐色	タ	良好	口縁クロ、体部、底部ヘラ整形
手づく ね土器	B 5	赤褐色	タ	タ	手づくね
椀		タ	タ	タ	体部、底部ヘラ整形
椀	35	タ	小量の砂粒を含む	タ	体部、底部ヘラと指で整形
甌	19	褐色	タ	タ	器面横タタキ文あり

馬場末式土器—その4—



器形 点番号	出土地 点番号	色調	胎土	焼成	特色
盤	22A	赤褐色一部褐色	砂粒を含む	不良	体部、底部ヘラ整形
椀	B 1	赤褐色一部黒褐色	多量の砂粒を含む	良好	*
椀	2	赤褐色	大粒砂粒混入	不良	*
杯	22B	*	砂粒を含む	*	内面タタキ目、体部、底部ヘラ整形
椀	7	*	多量の砂粒を含む	*	内面ヘラ整形、体部は敲目痕が残る
椀	44	*	砂粒を少量含む	良好	体部、底部ヘラ整形
椀		*	大小の砂粒を含む		体部、底部ヘラ整形、口縁波状
椀	B 5	*	少量の砂粒を含む	*	体部、底部ヘラ整形
椀	33	*	*	良好	*
椀		*	大小砂粒を含む	不良	*

B 4 区の22A, 22B, 22C は重なって出土

山根・石屋敷遺跡の歴史

I. 山根・石屋敷、そして馬場木遺跡の発掘の経過とその出土遺構・遺物の大要を紹介したが、これらの発掘を通してどのような歴史をわれわれは知り得る事ができたか、この点について簡明に述べていこう。

第四次の発掘調査で、地中深く縄文時代の土器と石錘が発見されたのは、大きな成果であった。実はこの縄文土器などの発見までは、春野町を含めて呑南平野ではまったく縄文時代の遺跡・遺物は発見されていなかった。この発見によってこの地域の歴史が約3000年前の縄文時代後期までさかのぼることが明確になった。ただこの縄文時代の遺物を包含する地層が完全な砂層であることから、これらの遺物は埋没していた場所に初めからあったのではなく、たぶん洪水とともに流され堆積したものと考えられるのである。

さすればもとの流される以前の縄文遺跡は、一体どこなのであろうか。縄文時代の人たちは高位台地の舌状部の先端に住むことが多いことは、筆者の経験から体得した一つの結論である。この結論から考えれば、彼等のもとの立地の場所は、山根・石屋敷遺跡の西方30~40mの所にある標高22.5mの山根の残丘こそ彼等縄文人の住いであったろう。そして山根の残丘の南側の標高10mあたりの舌状部にその住居が建てられていたのでなかろうか。そしてここに住んだ縄文人は、木の実の採集や狩猟ももちろん生活の糧として行ったであろうが、出土した遺物のなかに石錘があったことは重要な事である。

この石錘はその大きさから言って、大きな河川における淡水網漁を物語るものであろう。その場合現在遺跡の近くを流れている新川川のような小河川では駄目であって、もっと大きな河川での漁法である。ここで問題になってくることは、山根・石屋敷遺跡の南方部に標高2~3.5mの低湿地が幅100mで存在することである。この低湿地は現在の新川川にそって溝状にあることから、これこそ三千前の縄文時代に山根遺跡の近くを流れた大きな河川であると考えてよかろう。

さてこのような大きな河川が現在この山根・石屋敷周辺には見当らないが、これは以後における河川水路の変更のためである。ここで幅100m級の河川を、この山根・石屋敷遺跡に接するように持ってくるとすれば、当然現在の仁淀川しか存在しない。かかる意味において、筆者はその昔仁淀川はこの山根・石屋敷の北を流れていると考えるわけである。

ところが遺跡の発掘の結果をみると、本山根・石屋敷遺跡では数回洪水に見舞われた痕跡が歴然としている。そしてその場合、遺跡をおそった洪水の水は、川の流れとは反対側の南部からおそっている。これは洪水による上砂の堆積、とくに砂礫層の堆積から推定

したものである。この砂礫層の堆積から、山根・石屋敷遺跡で確認し得た洪水は、

1. 繩文後期中葉（約3000年前）
2. 弥生前期中葉（約2150年前）
3. 弥生中期初頭（約2000年前）
4. 弥生中期末（約1800年前）

の四時期である。そのうち1・4は大規模な洪水であり、1・3は割合に小規模のようである。

次に問題になるのは、旧仁淀川の大出水時に、山根・石屋敷遺跡の南側から何ゆえにはげしい水流が遺跡に流れ込んだかというと、それは遺跡付近の地形にその理由がある。②の地図をみていただければわかるように、山根の小山丘の北に標高13.9mの小山丘があり、旧仁淀川はこの狭い間を流れているのであるが、これが大出水になると、流れの隘路となり、あふれた水は山根の小山丘の西麓をそって流れ、その南端部をえぐって渦を巻いて山根・石屋敷をおそったのではないかと考えられる。

II. 山根遺跡から繩文晩期最終末（約2250年前）の入田B式土器が、発掘地区の西側からたった一片出土している。この土器は高知県西部では、南四国最古の弥生土器である入田工式土器とともに出土し、すでに稻作を開始しているが、山根遺跡でのこの時期での稻作の開始は、今回の発掘では未解決であった。たった一片の晩期繩文土器片の出土であり、それに伴う最古の弥生土器の未発見はこれを解決させるにたりなかった。

ただ確実に本遺跡で言えることは、弥生前期中葉の土器片（西見当II式土器）—約2150年前—が出土しているので、この段階ではすでに山根遺跡の南側の自然の湿地を利用しての稻作はあったと考えねばならない。そういう点において、吾南平野はもちろん高岡平野さらには仁淀川流域諸平野における稻作の最初の開始は、この山根遺跡であることは当然である。

稻作開始以後、弥生前期末から弥生中期初頭を迎える。いわばこの時期が最も本遺跡の栄えた頃とみてよからう。本遺跡から発見された弥生時代の遺構一住居址とそれを囲む貯蔵穴はすべてこの時期のものであり、また発見された弥生時代の遺物の大半はこの時期のものである。住居址は楕円形の住居で、県外の住居址に比較すると、壁の高さが余り高くない。これは暖い土佐の風土に適合するよう低くしたのでなかろうか。貯蔵穴は深さは他の遺跡のものに比較すると浅いが、この土地の地層を充分弥生人は知って、わざと浅くしたのである。深く掘ると砂層で水が湧くので貯蔵に適しない。ゆえに浅い貯蔵穴を数多く、また浅いゆえにくずれ易いので、たぶん杉板で作った羽目板を利用して、貯蔵穴の壁のく

それがなきようにしている。これも山根・石屋敷に住んだ弥生人の生活の慧慧である。

貯蔵穴のなかには食料が主として納められていたであろうか、それらの食料は土器のなかに入れられて穴内に入れられていたであろう。さらに砥石・石斧・石鎌の如き石器類も貯蔵庫にしまわれていたと思われる。

住居址の床面から砥石・石槍・敲石・石斧類の石器や多くの土器片が出土したが、とくに注目すべき遺物は紡錘車の出土である。紡錘車は糸を紡ぐための道具で、これががあることはすでにこの遺跡で織物が織られていたことを物語るものである。弥生前期末～弥生中期初頭は、今から約2100～2000年前とみてよかろう。

III. 弥生中期中葉（城式・北カリヤ式）そしてそれにつづく弥生中期末（神西式・龍河洞式）の各型式土器が、発掘によって発見され、またそれに伴う石器類も出土している。このように各時期各型式の土器が弥生中期末（約1800年前）までつづいてみられるのは、本遺跡が弥生時代の生活に適合し、住み易い所であったからであろう。以上中期の各型式の土器のうち、量的に多いのは神西式土器であり、この時期も本遺跡の繁栄の時期である。ところがこの神西式土器につぐところの後期前半の土器は、山根石屋敷遺跡のどこを掘っても出土しない。これは、その時期に一時的であるか、山根・石屋敷に弥生人が住まなかたことを物語るものであろう。この原因は先述した神西式土器を使った弥生中期末の本遺跡での大洪水にあると思われる。

弥生後期末になると再び弥生人がこの山根・石屋敷遺跡に住みつくようになる。この時期の土器はヒビノキⅡ式土器と呼ばれる土器で、約1700年前のものである。この時期になると石器がまったく姿を消し、鉄器が普及するが鉄器自体はくすって残らない。

この弥生後期末はこの山根・石屋敷にも弥生人が住むが、それにもまして最近判明したことであるが、西分の増井地区がこの時期の大集落遺跡であることである。近い将来またこの増井地区の考古学的調査が必要であろう。またこの弥生後期末の墳墓は、土佐山田町ヒビノキ遺跡の例から成人のものは土壙墓であろうか、乳幼児の墓は馬場末遺跡で発見された壺棺であろう。二つの壺のなかに乳幼児を入れるわけであるが、二つの重ねた壺とも、わざと打欠がれた壺を利用していている。これは死者には完全な品を与えない民俗として、注目してよかろう。

IV. 古墳時代から奈良時代にかけて、山根・石屋敷遺跡は、ごくまれに遺物が出土するが、ほとんど無人化の時代と言ってよかろう。この現象に対し、新川川対岸の西分馬場末遺跡では、この時期の遺跡・遺物が多量に発見されている。とくに馬場末遺跡では西暦四世紀末から五世紀前半にかけての土師器が折りかさなるようにして発見された。各器形の土

器を含む立派な土器群であるので、型式的に馬場末式土器と命名することにした。

この古墳時代の土器文化が基盤となるのであろうか、奈良時代には馬場末遺跡に近い大寺地区には奈良時代の寺院が建立される。大寺廃寺址も将来の検討を要するものである。また馬場末遺跡には奈良～平安時代の須恵器も多く出土し、なかに焼き損じの須恵器を包含しているところから、近くに窯跡の存在も考えられる。奈良時代の寺院には大寺の寺名が残っているが、あるいはこれとの関連で現在大用と呼んでいる馬場末遺跡北方の丘陵地は、大寺の瓦や須恵器を焼いた窯跡で大窯が大用と変化したのではないかうか。

山根・石屋敷遺跡に再び話をもどそう。平安時代から中世にかけて、馬場末遺跡よりも石屋敷遺跡がその中心になってくる。平安時代の須恵器杯と伴出した縁釉陶器は、県内では初めての出土で注目してよいものである。縁釉陶器の破片であるが、その出土と出土地点の地理的位置一大寺と平安時代に建立されたと考えられる種間寺の中間にある石屋敷遺跡の位置、一さらには石屋敷自体の地名から考える豪族の屋敷の存在等々から、平安時代における都司級の豪族の存在を考えさせる。

また同時に室町時代の中ごろのものと考えられる溝状造構のなかから、古瀬戸灰釉陶器碗・青磁碗破片・瀬戸天目あるいは延喜通宝や北宋銭の出土から、これもその頃の有力豪族の存在をうかがわせる。とくに天目茶碗の出土はすでにその豪族によって、抹茶の愛飲が行われていたことを物語ることになろう。石屋敷遺跡の歴史時代の遺物は、瓦器の存在がその時期を示すように平安時代末から室町時代中葉までがその中心のようである。

これが室町時代後半に入ると、石屋敷地区からも少々出土するが、山根地区の山丘の山麓から特に多く出土する。そして古儀前の種壺・片口・壺鉢そして羽釜の如き、庶民の日常容器が特に多く出土することは注目してよいことであろう。

発掘参加者名簿

(すべての参加者に謹んで謝意を表します)

第一次山根発掘 (48.10.27~30)

- 発掘担当者 岡本 健児, 広田 典夫, 宅間 一之,
- 大学生 角谷 和男
- 文化財調査委員 中山 清城, 門田 瑞穂, 揚田 實喜, 岡崎 正直, 上田 茂徳, 秋森 勇
中村 兆志, 三好 源美
- 作業員 秋沢美佐子, 岡田 富子, 西森美代子, 山崎 橋子
- 教委事務局職員 近森 謙郎, 藤田 樽寅, 岡村 瞳男, 島崎 順, 山脇 輝彦

第二次山根発掘 (49.2.20~24)

- 発掘担当者 岡本 健児, 広田 典夫, 宅間 一之
- 大学生 菅原 清子, 赤松 繁栄, 川崎 賢子, 角谷 和男, 山本 啓介, 大町 潤子
山脇 伸一
- 文化財調査委員 中山 清城, 門田 瑞穂, 揚田 實喜, 岡崎 正直, 上田 茂徳, 中岡 祢輔
秋森 勇, 中村 兆志, 吉良 繁城, 三好 源美
- 作業員 松井 孝成, 伊野部彰義, 川沢 一博, 川島 良水
- 町職員 中内 紀子, 島田 節子, 広木真由美, 岩田 譲, 岡部 梢子, 栗山 桜
松本 延子, 岸田久美子, 並岡 弘子, 氏原 純志, 松本 征男, 上田 恵子
田所 三男, 横川 信衛, 中山須賀子, 中山 啓子, 川村真貴男, 吉川 智子
中山 雅雄, 勝賀野和美, 片山 道夫, 秋永 薫一, 矢野 孝男, 国沢 正奏
中平 福子, 森岡智恵子, 前田 律, 森本 博章, 岡部 功, 横山美恵子
徳平 洋子, 町田れい子, 前島 瞬, 川島 貞子, 中山 榮司, 荒木 菊恵
筒井 邦子, 山下 幸美, 山本 満, 池上 孝雄, 門田 恵子, 山崎 雅市
小島 直士, 沢田 沙代, 近沢 弘明, 吉永 齋, 鈴木あけみ, 前田 博人
矢野美智尾, 高橋 克之, 金田 光雄, 山崎 輝, 川沢 一紀, 宮田 勇
- 教委事務局職員 岡村 瞳男, 島崎 順, 深瀬 峯, 藤田 樽寅, 山脇 輝彦

第一次西分馬場未発掘 (49.8.5~7)

- 発掘担当者 岡本 健児, 広田 典夫, 宅間 一之
- 大学生 氏原 学, 白倉二三男, 角谷 和男, 広田 佳久, 寺尾 弘子, 寺尾 靖代
西岡佐和子
- 青年団 伊野部彰義, 中島 孝一, 千頭 初江, 山口 佐井

- 文化財調査委員 揚田 武実, 川島 良水, 門田 瑞穂, 中山 清城, 三好 源美, 中村 兆志
岡崎 正直, 岡村 治, 上田 茂穂
- 町 職 員 闇 義和, 近沢 潤, 山崎 路幸, 山崎雅市, 氏原 制志, 並岡 弘子
岸田久美子, 森 潤子, 片山 道夫, 岡田 義英, 岡崎 瞳, 森本 博章
島崎 順, 前田 邦夫, 徳平 洋子, 山下 幸美, 筒井 邦子, 荒木 癜恵
上田 和子, 森田 幹彦, 沢田 沙代, 岡内 雄幸, 横田 正人, 小島 岸江
近沢 弘明, 森岡 義雄, 川沢 一紀, 金田 光雄, 川崎 兆, 高橋 一之
- 教委事務局職員 入交 雅彦, 岡村 瞳夫, 鈴木あけみ, 徳平 博迪, 森岡 静子, 山脇 敏江
高橋 法生, 山脇 輝彦

第三次山根発掘 (50. 3. 9)

- 発掘担当者 岡本 健児, 広田 典夫, 宅間 一之
- 青年団 山崎 明久, 中山 順一, 徳弘 芳雄
- 文化財調査委員 揚田 武実, 川島 良水, 門田 瑞穂, 中山 清城, 三好 源美, 中村 兆志
土居 昭和, 秋森 勇, 岡崎 正直, 岡村 治, 上田 茂穂
- 町 職 員 松井 孝成
- 教委事務局職員 笠原 増喜, 入交 雅彦, 岡村 瞳男, 前田邦夫, 徳平 博迪, 高橋 法生
矢野美奈子, 山脇 輝彦

第四次山根発掘 (51. 3. 5 ~ 19)

- 発掘担当者 岡本 健児, 広田 典夫, 宅間 一之
- 大学生 吉良 敬介, 岡本 桂典, 角谷 和男, 田中 幸一
- 文化財調査委員 中山 清城, 揚田 實喜, 門田 瑞穂, 秋森 勇, 三好 源美, 岡崎 正直
岡村 治, 上田 茂穂, 川島 良水
- 町 職 員 池上 栄子, 谷口 豊明, 高橋 左右, 吉村 博, 岡部 梓子, 岸田久美子
国沢 和男, 勝賀野和美, 大黒 初, 岡崎 瞳, 岡部 和子, 徳平 洋子
島崎 順, 岡部 功, 横川 信衛, 前田 律, 石川 誠二, 前島 碧
小島 直士, 沢田 沙代, 門田 東子, 中山寿賀子
- 教委事務局職員 入交 雅彦, 笠原 増喜, 藤原 豊, 矢野美奈子, 井上 宗, 高橋 法生
徳平 博迪, 森岡 静子, 近森 謙郎, 山脇 輝彦